

# 螺旋階段

みはえる

夢から目が覚めると、私は虫になつてはいませんでした。あの小

説を読んでからというもの、これを確認するのが朝の習慣なのです。その代わりに酷い吐き気がしました。どうしてこんなになるまで飲

んだのでしょうか。全く覚えていません。私は酔いを醒ますため少しばかり歩くことにしました。

街を歩いていると、私は酷い空腹を感じました。何かを食べなければいけませんが、やはりお金がありません。先日まではあんなにあつたお金は何処にいったのか。昨日ポーカーで摩つてしまつたのかもしれません。まあ、ギャンブルで儲けてギャンブルに消えていつたのですから仕方がありません。やつても無意味なことはわかります。でも辞められないのが賭博なのです。まさに麻薬です。しかし今はそんなことを考へている場合ではありません。兎にも角にもなにかを食べなくてはいけません。少し迷った挙句、私はアパートに帰ることにしました。歩くよりは何もしないで部屋で寝ていたほうがお腹が減らないかもしません。それにもしかしたら、何か食料があるかもしれないという希望的な観測の為です。帰り道は酷く長く、街は私を除けものにしたかの如く私を孤独にしました。アパートのドアを開けると一枚のビラが部屋の中に滑り込んできました。

被験者募集！！ 期間…一週間程度 給与…500万 詳細はT理学  
研究所502まで

私は一瞬目を疑いました。しかし、どんなに目を擦つても、紙を叩いても紙面上に書いてある文字は変化しませんでした。これだけ条件が良いというのは何か裏があるかもしれません。しかし、背に腹を取つて代えることはできそうもありません。私は部屋で食料を探すのも忘れて、研究所へと向かいました。

研究所はかなり大きい所でした。これだけの研究所ならば安心でしょう。私は中に入り、502号室まで行き、ドアをノックしました。中からどうぞと言う声が聞こえたので中に入るとそこには一人の老人と無数の配線が目に飛び込んできました。

「何か用かね」とその博士は言いました。

「被験者募集の張り紙を見て来ました」と私が答えると博士は笑つて

「で、やるのかい？」と言いました。

「その前、いったい私は何をするのです？」

「なあに簡単さ、あんたはここで一週間ほど座つていればいい。それで実験終了さ」と老人は奥にある椅子を指差して言いました。椅

子には驚くほどのコードが出たり入ったりしていました。

「いったいなんの実験をやるのですか？」と私が質問すると博士はめんどくさそうに説明をしてくれました。

「わしの研究テーマの一つは人間の意識に関することじや。まあ脳科学と言つても差支えはないかも知れんが。今回はお前さんの頭の中にもう一つの現実を作り出す。そこでお前さんには一週間ほどそのもう一つの現実のなかで暮らしてもらう。その時の脳の反応が現実とどのように異なるのかを検証するのじや。」と言つて博士は部屋の壁にチョークで何やら数式を書き始めました。よく見ると部屋の壁は黒板でできていました。一通り数式を書き終えると博士は満足したように椅子に腰をおろしました。

「理解できたかな？」

と博士はおどけながら尋ねました。私は苦笑いを作りながら首を捻つて見せました。

「いつたいどうやつて現実をつくるのでしょうか？」

「まあ、簡単に言うとだな、お前さんにはこのチョークが見えるだろう？」と博士はチョークを取り上げて言いました。私は頷きました。

「このチョークの光がお前さんの目に入り、信号が大脑に送られることで初めてチョークが認識されるわけじや。そこで、お前さんの大脑にわしが直接電気信号を送つてやればお前さんにはチョークがあるようになる。これを應用すれば頭の中にもう一つの現実を創り出すことができるというわけじや」と博士は得意げに言いました。本当にそんなことが可能なのでしょうか。例えば創り出した現実の中で私が何をするかのよつてその世界は一つ一つ違う世界に

なる筈です。その総てを操作することは難しいのではというようなことを博士に質問しました。

「世界というのはいくつかの原理によつて創られておる。つまるところ、その原理と初期条件さえ与えてやれば二つの世界は全く同じ世界へと進化するはずじや。簡単にいえば、同じ条件で実験すれば同じ結果が得られるのと同じことじや」と博士は自慢げに話しました。私はどう同じなのかは全くわかりませんでしたが、とりあえず納得することにしました。

「それで、危険性などはあるのでしょうか」と私は一番気になる事を聞いてみました。

「いままでに三人ぐらいやつたが今のところ異常はないから大丈夫じやろ」

この言葉を聞いて私は遂にこの仕事を引き受けることにしました。博士にこの旨を伝えると博士は嬉しそうに笑いながら、私を椅子へと誘導しました。椅子に座ると、博士は私の頭にヘルメットのようなものを装着させ、体中にペとペと椅子から伸びているコードを張り付けていきました。そして私を椅子に固定すると、いきなりパンツを脱がされました。

「何をするんですか？」と私は驚いて聞きました。

「なあに、こつちに履き替えてもらうだけさ」と博士はなにやらいろんな管のついたモノを見せました。

「なんですかそれは？」

「お前さんは一週間もここで座りっぱなしになるわけじやから排泄物はどうにかせねばならんじやろ、そのためのものじや」と博士は当然のように言いました。

それから私は博士が持ってきた管付きパンツをはかされました。形容できそうもない痛みを伴いましたがしかたありません。こうして、準備が整ったようだ

「さて、準備は終わったのじゃが、向こうに行く前にいくつか注意点がある。まず、お前さんの記憶を少し削って、ここで実験を受けているということはわからなくしてある。こうしないと、向こうについた途端いきなり自殺してみたり、強姦してみたりする輩がおるからな。まあ、それも良い研究対象じやが。次にお前さんには一週間向こうで生活してもらうことになるが、その間の生活費として取りあえず100万ほど送つておく、そして一週間たつたらわしがお前さんをこちら側に連れ戻すことになるが、ここまでで何か解らん点はあるかね？」

「大丈夫です」と答へはしたものの、正直分からぬことだらけで何がわからぬかわかりませんでした。

「それじや、行くぞ」と博士は言い、レバーを下げました。すると、目の前が真っ暗になり、意識が消えてしまいました。

ました。すると、ポケットがいつもより重いことに気が付きました。確認すると、そこには恐ろしいほどの札束がありました。いつたいどうしたのでしようか。私は少し考えることにしました。思いついたのはカジノで一儲けしたのではないかということです。それで、浮かれて酒を飲みすぎて全く覚えてないのかもしれません。それが一番辻褄が合っているような気がします。でも実際はどうしてお金があるかなんてことは重要ではありません。ここにあるとすることが重要なのです。私は嬉しくなつて鼻歌を歌いながらアパートの階段を下りて、街のレストランへと向かいました。レストランにつくと私は日頃から食べたいと思っていた一番高いステーキを注文しました。ステーキを待つていると友人が声を掛けてきました。

「よう、ずいぶん羽振りがいいみたいだな」と彼は言いました。  
「カジノで一儲けしたんだよ」と私は答えました。

「ほー珍しいこともあるもんだな、お前が勝つなんて。で、いくらくらい勝ったんだ？」

「そうだな、ざつと100万は勝つたかな」と私は得意になつて言いました。

「100万？そりやすげえ、じやようそれを軍資金にして今夜、ボーカーでもしねえか？」

「いやあ」と私は渋りました。昨日勝ったからといって今日も勝てるとは限らないのが賭博なのです。

「いや大丈夫だつて。お前は今運が回つて来てるんだよ、これを見す見す逃すやつがいるか？ここで勝負に出なきやギヤンブラージやないぜ。100万なんてどうせすぐ使つちまうんだ、それならこお昼ご飯を食べなければなりません。私は立ち上がり、コートを着

「で一勝負して大儲けに賭けるのがギャンブラーだろ。これを逃したら結局また貧乏に逆戻りだぜ？」と彼は言いました。私もここまで言われて黙っていることはできません私もギャンブラーの端くれなのです。どうせ、ギャンブルで儲けたお金です。ギャンブルで失うならそれも本望でしょう。

「いいですよ。何処でやるんです？」

「キングズリービルの7階、8時からだ」と彼は言い、自分の席へと帰つていきました。

私は昼食を食べ終ると、私はアパートに帰りシャワーを浴びながら先程の約束を少しばかり後悔しました。しかし約束を破るわけにはいきません。そのあと、私は『ステイング』を見ました。ギャンブルに行く前に私は必ずこれを見ることにしています。なんだか勝てる気がしてくるのです。これは賭け事において重要なことです。勝てる気がしない時に勝てるわけがないのです。もちろん、勝てる気がしても負けるときがありますが。見終わると、私はタキシードを着てキングズリービルへと向かいました。

夢から目が覚めると、私は虫になつてはいませんでした。あの小説を読んでからというもの、これを確認するのが朝の習慣なのです。その代わりに酷い吐き気がしました。どうしてこんなになるまで飲んだのでしょうか。全く覚えていません。私は酔いを醒ますため少しばかり歩くことにしました。

街を歩いていると、私は酷い空腹を感じました。何かを食べなければいけませんが、やはりお金がありません。先日まではあんなにあつたお金は何処にいったのか。昨日ポーカーで摩つてしまつたの

かもしません。まあ、ギャンブルで儲けてギャンブルに消えています。でも辞められないのが賭博なのです。まさに麻薬です。しかし今はそんなことを考えている場合ではありません。兎にも角にもなにかを食べなくてはいけません。少し迷った挙句、私はアパートに帰ることにしました。歩くよりは何もしないで部屋で寝ていたほうがお腹が減らないかもしません。それにもしかしたら、何か食料があるかもしれないという希望的な観測の為です。帰り道は酷く長く、街は私を除けものにしたかの如く私を孤独にしました。アパートのドアを開けると一枚のビラが部屋の中に滑り込んできました。

被験者募集！！期間…一週間程度 給与…500万 詳細はT理学研究所502まで

私は一瞬目を疑いました。しかし、どんなに目を擦つても、紙を叩いても紙面に書いてある文字は変化しませんでした。これだけ条件が良いというのは何か裏があるかもしれません。しかし、背に腹を取つて代えることはできそうもありません。私は部屋で食料を探すのも忘れて、研究所へと向かいました。

研究所はかなり大きい所でした。これだけの研究所ならば安心でしょう。私は中に入り、502号室まで行き、ドアをノックしました。中からどうぞと言う声が聞こえたので中に入るとそこには一人の老人と無数の配線が目に飛び込んできました。

「何か用かね」とその博士は言いました。

「被験者募集の張り紙を見て来ました」と私が答えると博士は笑つて

「で、やるのかい?」と言いました。

「その前、いったい私は何をするのです?」

「なあに簡単さ、あんたはここで一週間ほど座つていればいい。それで実験終了さ」と老人は奥にある椅子を指差して言いました。椅子には驚くほどのコードが出たり入ったりしていました。

「いったいなんの実験をやるのですか?」と私が質問すると博士はめんどくさそうに説明をしてくれました。

「わしの研究テーマの一つは人間の意識に関することじや。まあ脳科学と言つても差支えはないかも知れんが。今回はお前さんの頭の中にもう一つの現実を作り出す。そこでお前さんには一週間ほどそのもう一つの現実のなかで暮らしてもらう。その時の脳の反応が現実とどのように異なるのかを検証するのじや。」と言つて博士は部屋の壁にチョークで何やら数式を書き始めました。よく見ると部屋の壁は黒板でできていました。一通り数式を書き終えると博士は満足したように椅子に腰をおろしました。

「理解できたかな?」

と博士はおどけながら尋ねました。私は苦笑いを作りながら首を捻つて見せました。

「いったいどうやって現実をつくるのでしょうか?」

「まあ、簡単に言うとだな、お前さんにはこのチョークが見えるだろ?」と博士はチョークを取り上げて言いました。私は頷きました。

「このチョークの光がお前さんの目に入り、信号が大脑に送られることで初めてチョークが認識されるわけじや。そこで、お前さんの大脑にわしが直接電気信号を送つてやればお前さんにはチョークがあるよう見える。これを応用すれば頭の中にもう一つの現実を創り出すことができるというわけじや」と博士は得意げに言いました。本当にそんなことが可能なのでしょうか。例えば創り出した現実の中で私が何をするかのよつてその世界は一つ一つ違う世界になる筈です。その總てを操作することは難しいのではというようなことを博士に質問しました。

「世界というのはいくつかの原理によつて創られておる。つまるところ、その原理と初期条件さえ与えてやれば二つの世界は全く同じ世界へと進化するはずじや。簡単にいえば、同じ条件で実験すれば同じ結果が得られるのと同じことじや」と博士は自慢げに話しました。私はどう同じなのは全くわかりませんでしたが、とりあえず納得することにしました。

「それで、危険性などはあるのでしょうか?」と私は一番気になる事を聞いてみました。

「いままでに三人ぐらいやつたが今のところ異常はないから大丈夫じやろ」

この言葉を聞いて私は遂にこの仕事を引き受けることにしました。博士にこの旨を伝えると博士は嬉しそうに笑いながら、私を椅子へと誘導しました。椅子に座ると、博士は私の頭にヘルメットのようなものを装着させ、体中にペとペと椅子から伸びているコードを張り付けていきました。そして私を椅子に固定すると、いきなりパンツを脱がされました。

「何をするんですか？」と私は驚いて聞きました。

「なあに、こっちに履き替えてもらうだけさ」と博士はなにやらいろんな管のついたモノを見せました。

「なんですかそれは？」

「お前さんは一週間もここで座りっぱなしになるわけじやから排泄物はどうにかせねばならんじやろ、そのためのものじや」と博士は当然のように言いました。

それから私は博士が持ってきた管付きパンツをはかされました。形容できそうもない痛みを伴いましたがしかたありません。こうして、準備が整ったようだ

「さて、準備は終わつたのじやが、向こうに行く前にいくつか注意点がある。まず、お前さんの記憶を少し削つて、ここで実験を受けているということはわからなくしてある。こうしないと、向こうについた途端いきなり自殺してみたり、強姦してみたりする輩がおるからな。まあ、それも良い研究対象じやが。次にお前さんには一週間向こうで生活してもらうことになるが、その間の生活費として取りあえず100万ほど送つておく、そして一週間たつたらわしがお前さんをこちら側に連れ戻すことになるが、ここまでで何か解らん点はあるかね？」

「大丈夫です」と答えはしたものの、正直分からぬことだらけで何がわからぬいかわかりませんでした。

「それじや、行くぞ」と博士は言い、レバーを下げました。すると、目の前が真っ暗になり、意識が消えてしましました。

私が覚めると、私は虫になつてなかつたのでひとまず安心しまし

た。私はこの話を読んで以来、起きてからこれを確認するのが習慣となつてしているのです。しかし、いつたい昨日、何があつたのかまるで覚えていません。お酒を飲みすぎたのでしょうか。でも、不思議と二日酔いになつていよいよです。時計を見るともう12時をまわつていました。どうりでお腹がすくはずです。とりあえず、お昼ご飯を食べなければなりません。私は立ち上がり、コートを着ました。すると、ポケットがいつもより重いことに気が付きました。確認すると、そこには恐ろしいほどの札束がありました。いつたいどうしたのでしょうか。こんな大金いつたいどうやって手に入れたのでしょうか。私は少し考えることにしました。思いついたのはカジノで一儲けしたのではないかということです。それで、浮かれて酒を飲みすぎて全く覚えてないのかもしれません。それが一番辻褄が合つているような気がします。でも実際はどうしてお金があるかなんてことは重要ではありません。ここにあることが重要なのです。私は嬉しくなつて鼻歌を歌いながらアパートの階段を下りて、街のレストランへと向かいました。レストランにつくと私は日頃から食べたいと思っていた一番高いステーキを注文しました。ステーキを待つていると友人が声を掛けてきました。

「よう、ずいぶん羽振りがいいみたいだな」と彼は言いました。

「カジノで一儲けしたんだよ」と私は答えました。

「ほー珍しいこともあるもんだな、お前が勝つなんて。で、いくらくらい勝つたんだ？」

「そうだな、ざつと100万は勝つたかな」と私は得意になつて言いました。

「100万？そりやすげえ、じやようそれを軍資金にして今夜、ボ

「カーモもしねえか？」

「いやあ」と私は洟りました。昨日勝ったからといって今日も勝てるとは限らないのが賭博なのです。

「いや大丈夫だって。お前は今運が回って来てるんだよ、これを見す見す逃すやつがいるか？ここで勝負に出なきゃギャンブラーじやないぜ。100万なんてどうせすぐ使っちゃうんだ、それならここで一勝負して大儲けに賭けるのがギャンブラーだろ。これを逃したら結局また貧乏に逆戻りだぜ？」と彼は言いました。私もここまで言われて黙っていることはできません私もギャンブラーの端くれなのです。どうせ、ギャンブルで儲けたお金です。ギャンブルで失うならそれも本望でしょう。

「いいですよ。何処でやるんですか？」

「キングズリービルの7階、8時からだ」と彼は言い、自分の席へと帰つていきました。

私は昼食を食べ終ると、私はアパートに帰りシャワーを浴びながら先程の約束を少しばかり後悔しました。しかし約束を破るわけにはいきません。そのあと、私は『ステイング』を見ました。ギャンブルに行く前に私は必ずこれを見ることがあります。なんだか勝てる気がしてくるのです。これは賭け事において重要なことです。勝てる気がしない時に勝てるわけがないのです。もちろん、勝てる気がしても負けるときがありますが。見終わると、私はタキシードを着てキングズリービルへと向かいました。

私は干からびた荒野に立っていました。もう日は傾きかけています。とりあえず泊まれそうな場所を見つけなければなりません。辺

りを見渡すと遠くのほうに塔が建っているのがわかりました。私はそこに向かつて歩き始めました。近くまで来てみると、随分大きな塔だとわかります。塔の手前まで行くとそこに一人の老人が立つているのがわかります。

「どうしてこんなところにいるのです？」と私は尋ねました。

「総ては最初から決まつておるのじや」と老人は答えました。

「総ては決まつておるとはどういうことなのでしょう？」

「全く分からず屋が」と老人は怒つた口調で言いました。

「原理と初期条件で総ては決まつておるのじや」と続けました。私には何を言つてているのかさっぱりわかりませんでした。私はただ泊まる場所が欲しいだけなのだと老人に伝えました。だったら早く

言わんかと老人は言つて、付いて来るよう手招きしました。老人は塔の前に立ち、壁を押しました。すると、壁が反転して中が露わりになりました。どうやら隠し扉だったようです。私は中に入ると隠し扉は再び閉められました。塔の中は酷く暗く、コンクリート剥き出しの螺旋階段になっていました。螺旋階段は下にも続いていたのでここには地下室があるのでしよう。私はどうせなら一番高い所から景色を見たいと思い、階段を昇ることにしました。しかし昇つても昇つても階段は終わる気配を見せません。いつたいどこまで続いているのでしょうか。次第に私は疲れてしまつて、私は壁にもたれ掛りました。すると壁が反転しました。私の体は塔の外へと投げ出されました。落ちると思った瞬間、私は自分が既に地面に倒れこんでいることに気付きました。一体どういうことでしょう。私は階段を昇つてきた筈です。しかし壁を反転させてみると目の前には同じように干からびた荒野が広がっているのです。私は何が何だか訳

がわからなくなってしまいました。私はすっかり疲れてしまい、考えることを止めて塔の中で眠ることにしました。

夢から目が覚めると、私は虫になつてはいませんでした。この小説を読んでからというもの、これを確認するのが朝の習慣なのです。その代わりに酷い吐き気がしました。どうしてこんなになるまで飲んだのでしょうか。全く覚えていません。私は酔いを醒ますため少しばかり歩くことにしました。